

論文審査の結果の要旨

氏名 長井 謙治

本論文は、日本列島の自然環境が、氷期の大陸的な寒冷・乾燥気候を基調とする更新世から、列島特有の温暖・湿潤気候を基調とする完新世にかけて大きく転換したのに適応して、人類文化・社会が対照的に変化した移行期(晩氷期)後半(縄文時代草創期)の集団的な文化動態を、同時期を特徴づける有舌尖頭器に象徴される石器群の技術構造に関する徹底的な分析を通して、従来の定説であった大陸からの技術・集団伝播による一系的な縄文化プロセス説が成立しがたいことを明らかにした完成度の高いきわめて独創的な研究である。

本論文は、9章から構成されており、第1章緒論では、有舌尖頭器をめぐるこれまでの学史を整理して、本論文の問題の設定と方法について述べられている。これまでの諸説が、縄文文化の大陸起源説を前提に、移行期に特有な有舌尖頭器の形態分類とその型式間の関係性にのみ焦点が当てられる抽象的かつ非生産的な議論に終始してきた点を問題視し、現実の資料の実態からこの議論が成立しないことを明らかにして、新たな視点に基づく研究法を提案する。

第2章～第5章までは、具体的な分析が展開されている。まず第2章では、有舌尖頭器の器体を仕上げるために発揮される押圧剥離技法に関する徹底的な実験考古学的分析によって、有舌尖頭器にしばしば観察される斜行剥離が、二つの押圧剥離法(「正位」と「逆位」)から成り立つことを見いだした。論文提出者は、自身の10年以上に及ぶ石器製作実験の経験の積み重ねと、日米の現代の石器製作者の製作実験に対する参与観察等の分析から、この結論を導き出している。第3～5章では、列島の有舌尖頭器石器群資料を徹底的に渉猟した結果、二つの剥離法が、当時大陸と陸接していた北海道(「逆位」)と、同じく当時ひとつの古本州島を形成していた本州・四国・九州(「正位」)という単位の違いに分割されることを周到な議論を経て明らかにしている。この研究成果は従来指摘されたことがなく、本論文のきわめて重要な成果のひとつである。

結論にあたる第6～9章では、この研究成果の説明と解釈に当てられている。その際、動作連鎖論という新しい分析概念に基づいて、ふたつの地域の剥離法の違いを「石器扱い」と概念化し、それを「社会的慣習」という伝習される身体的な文化行為の差異として認識したが、その蓋然性は説得力ある議論として結実している。

従来の文化要素としての石器の形態学的研究というレベルを超克し、社会慣習や文化伝統を石器から読み解くという具体的方法を実践した本論文は、研究理論や方法の視野を拡大させ、より具体的な先史集団の文化的動態を展望しうる地平を本格的に切り開いたという意味でも秀逸である。

近年大陸渡来による縄文文化成立説に関する批判が提起されてはいるが、本論ほど具体的かつ詳細な分析による批判はなかったと言えよう。ただし、本論の分析が有舌尖頭

器を有する斜行剥離石器群に焦点を絞るあまり、その出現と消長関係に関する分析と展望が手薄であること、当時の先史集団の中で展開された「石器扱い」像にやや具体性を欠くこと等、不満を感じさせる部分もなくはないが、本論文の意義を損なうほどのものではない。むしろ、論文提出者の将来の課題とすべきであろう。

従って、本委員会は、博士(環境学)の学位を授与するにふさわしいと認めるものである。